

ホウライシダ



(撮影：桐原真希)

法勝寺旧街道にて

町内で最も公共機関が集中し、人口密度の高い法勝寺地区。その住宅街を流れる細い水路を初めて見た時、私はとても驚きました。なぜなら、そのせせらぎに、揺れる水草、泳ぐ小魚の姿、貝の影を見つけたからです。全国に1700近い自治体がありますが、役場のそばに、このような野生の生き物たちが観察できる水辺がある市町村は、そんなに多くないのではありません。これも南部町の自慢の一つです。

その旧街道の水路に、冬でも枯れずに水面を覆うように茎を伸ばしているシダが生えています。そのうちの一つは、ホウライシダと区別がしました。比較的他のシダと区別がしやすく、観賞用にも栽培されています。ホームセンターなどで「アジアシダム」と呼ばれ販売されていることもあります。

ホウライシダは、世界中の温帯から熱帯にかけて広く分布し、日本でも主に西日本に自生しています。場所によっては栽培されていたものが帰化しているようです。小さな銀杏形の葉っぱが細かく散らされ、光

沢のある黒い茎がより一層葉を引き立てているようにも見えます。

他の草木のように、際立って美しい花を咲かせる訳でもなく、心地良い芳香もなし、美味しい実もつけず、地味な姿が多いシダの仲間には、私にとってなかなか距離を縮めることができない植物の一つでした。しかし、学生時代にシダを研究している鹿児島大学の女性から、こんなことを聞いたのです。「シダはね、葉っぱの裏が楽しいのよ。」私は、始めは何のことだかさっぱり分かりませんでした。その後、実際に野外で、シダの葉をめくった時、「ああ、なるほど！」と合点しました。そこには、ソーラスと呼ばれる胞子の入った袋状の器官があり、その模様や形が種類や熟成度によって様々な様相を持っているのです。まさにシダの裏の顔を知った瞬間でした。まだまだ見分けられる「顔見知り」のシダは少ないですが、一体南部町にどれだけシダの種類があるか、少しずつ調べていこうと思います。

自然観察指導員 桐原真希